

「三人の中で飼育委員をやってみたい人、いませんか」  
先生がぼくらを見回したけれど、だれもおたがいの顔を  
見合わせるばかりだ。

「しようがないわね。それじゃあジャンケンで決めましょ  
う。はい、三人とも起立」

立ち上がったぼくらにむかって、教室のみんなが声をあ  
わせて叫んだ。

「さいしょはグー、ジャンケンポン！」

声に引きずられるように三人でジャンケンをした。村瀬  
と高本がチョキ、ぼくはパーをだした。

「はい、これで決まりました。二期の飼育委員は……」

先生は、いったん黒板を振り返った。

「女子は皆川久美さん、男子は鈴木邦雄くんです」

パチパチという拍手の音を、ぼくはうつむいて聞いてい  
た。

四校時は委員会の時間だった。それぞれの委員が集まっ  
て話し合いをする。飼育委員はウサギの飼育小屋のそばに  
集まることになった。

ウサギの飼育小屋は北校舎と裏門の間の空き地に建っ  
ていた。プレハブの小さな小屋の横に金網の囲いがあって、  
ウサギがなんびきかねそべっていた。

囲いのまえには、もう六年や四年の委員が集まっていた。

大きな六年の女がぼくらのほうに歩いてくると久美にたず  
ねた。

「安本くんはどうしたの」

久美がちらりとぼくを見て、小声でこたえた。久美はい  
つも声が小さいし、教室ではほとんど話さない。

「安本くんは転校しちゃったから……」

「わすれてた。あの子、夏休みに引越したんだったわね  
え」

六年生は、そこでぼくの顔をじろじろながめた。

「あんだ、飼育委員ははじめてでしょ。名前、なんていう  
の」

ぼくも小さな声で、鈴木邦雄ですと答えた。

「鈴木君ね。わからないことがあったら皆川さんに教えて  
もらいなさい」

そう言うのと、くると回れ右をして六年生のほうに戻っ  
て行った。そのとき後ろからだれかが肩をたたいた。振り  
返ると五年二組の佐々木守がにやにや笑っていた。

「へえ、おまえでも委員になることあるんだ」

佐々木とは三、四年のときクラスが一緒だったから顔と  
名前くらいは知っているが、あまり話したことはない。

そのとき校舎の方から六年二組の大森先生が歩いてくる  
のがみえた。さっきの六年の女がどなった。

「全員集合。学年ごとにならんでください」